

## 令和元年度第1回生駒市社会教育委員会議録(要約筆記)

1. 日時 令和元年7月17日(水)午後3時から

2. 場所 コミュニティセンター401会議室

3. 出席者

(委員) 大谷裕美子委員(議長)・山中治郎委員(副議長)・安部敬二郎委員・大原暁委員・近藤裕一委員・清水泰之委員・白樫学委員・中田弘司委員・平井富久子委員・益田碧委員・松尾正則委員・松山敏宏委員

(事務局) 中田教育長・八重生涯学習部長・梅谷生涯学習課長・西スポーツ振興課長・西野図書館長・錦図書館南分館長・中谷駅前図書室室長・平澤図書館北分館長・入井図書館主幹・谷江生涯学習課主幹・今井生涯学習文化係員・小関生涯学習文化係員

(欠席者) 大辻哲男委員・藤埜聖士委員

(会議の公開・非公開) 公開

(傍聴者) 1名

4. 議事内容

○ 委員紹介・事務局紹介

○ 審議案件

(1) 副議長の選出について

全会一致で、副議長は山中治郎委員に決定。

(2) 平成30年度「社会教育基本方針重点目標」にかかる実績報告について

(3) 平成31年度(令和元年度)生駒市教育大綱アクションプランについて

(4) 平成31年度(令和元年度)「社会教育基本方針及び重点目標」について  
それぞれ各課、事務局から説明

(5) その他

(2) 平成30年度「社会教育基本方針及び重点目標」にかかる実績報告について  
事務局から説明

(質疑等)

大谷議長           社会教育委員としてイベントに参加するなど、社会教育の現場に足を運んだ意見や感想などを発表していただきたい。

中田委員           家庭教育支援チーム「たけのこ」の事業に参加した。一つの社会教育団体でやっているというより、多くの人や団体が参加して活動していることが印象に残った。当日は非常に参加者が多く、各団体の口コミで参加者を募られたのかと思った。

私も市子連でイベントを行っているが、これまでは市子連のメンバーみで行っていたが、最近は商工会議所やおはなしの会と連携してイベントを盛り上げている。一つの団体で行うのではなく、様々な団体や人が協力して行っていくのが社会教育だと感じた。

(3) 平成31年度（令和元年度）生駒市教育大綱アクションプランについて  
事務局から説明

(質疑等)

大谷議長           昨年までは会議が年2回だったが、今年度は年3回になった。中身について話し合う機会が1回増えたので、有効な会議にしていきたいとともに、委員からもたくさん意見を出していただきたい。こちらのアクションプランに関しては4年計画で作ったもので、継続して進められるということによるしいか。

事務局           4月からこの設定目標で進めている。

大谷議長           新しいアイデア等あれば次回の会議であげていただきたいので、当日配布のものを含む会議資料を1週間前に送っていただきたい。今の発表で何か質問はあるか。

近藤委員           「子ども読書活動推進のための家庭・地域・学校それぞれの立場から課題を出し合い具体的な解決策を見出すワークショップを開催」とあるが、どのようなことをするのか。

また、図書館の資料受入冊数に関して、児童書を含む一般書の増加冊数でマイナスが多いが、何故か。

事務局

ワークショップについては夏休みに開催予定。平成17年度に子ども読書活動推進計画を策定してから15年が経ち、子どもたちを取り巻く読書環境や情報の採り方が変わってきているため、様々な分野の現場で子どもの本に関わっていただいている方に集まっていただき、課題を抽出し、新たな目標を立てようとしている。

資料受入冊数に関しては、図書館で年齢別におすすめの本を紹介して、数百冊のおすすめの本を図書館で一括購入し、市内各所に貸出をしてきた。10年ほどが経過し、貸出する学校や園の固定化、学校図書館の充実等により、貸出する手間の方が負担になり、図書館から各学校・園に移管したため、-9,000冊という数字になった。他に壊れたものや古くなったものの除籍もあるが、学校等への移管が大きな割合を占める。

松山委員

寿大学生及び卒業生による社会貢献活動を目的とした組織「寿生駒連絡協議会（気らくネット）」を活用した事業として、既に決まっているものはあるのか。

事務局

「気らくネット」は、家庭教育支援チーム「たけのこ」とともに、7月31日に壱分小学校での学校図書館の地域開放に合わせて、子どもの居場所づくり事業、親学習等を行う予定。また、地域の力を壱分小学校の中で活用していこうということで、校庭の草刈や児童の畑づくりの事前準備等も行っている。まだ立ち上がったばかりの組織のため、我々で地域のニーズ等の情報収集を行い、気らくネットへ情報提供し、活動していただくという流れを作っているところである。

松山委員

現在30名となっているが、今後は卒業生等色々な方が参加して広げていくのか。また、地域ごとに活動していくのか、それとも市内全域で活動していくのか。

事務局

寿大学の卒業生は数千人で、各地域で活動するだけの人数はおられるので、地域ごとで活動していただくのが理想である。今後は寿大学を通じて人材の発掘・育成を行い、気らくネットに参加してもらうようにしていきたい。現在は、気らくネットを知ってもらうべく、様々な団体とともに活動して、認知してもらうことが大事だと考えている。

清水委員 図書館で購入している雑誌は5つの館で調整して収集に努めていると書いてあるが、どのような基準で選ばれているのか。

事務局 全館で集って決めているということはない。オープンした図書館から順番に、新しく他の館が入れていない雑誌を優先的に受け入れてきたという歴史がある。その中で競合する雑誌に関しては譲り合いながら入れてきた。利用者からリクエストがあれば年に1回、リクエストを吸い上げて調整したり、購入を検討している。

清水委員 地域の特色に合わせて雑誌を購入することはないのか。また、各館で雑誌の交換などを行えば、公平性があるのではないか。

事務局 駅前図書室にはカフェスペースがあるため気軽に読める雑誌を置いたり、図書会館にはじっくり読み込むような雑誌を置くなど、来館者に合わせた選定は行っている。

雑誌は継続性があり、利用者の方がここにあると認識されているので、一つの雑誌を他の館のものと交換したり、雑誌を他の館に移動させることは、混乱を招いてしまうので考えていない。読みたい雑誌があれば、最新号は閲覧しかできないが、バックナンバーは取り寄せ・貸し出しが可能なため、そちらを利用していただきたい。

大谷議長 提案の一つとして、市民の声を聞く仕組みを作ってもらい、新たな声を聞き、今後購入していくものを決めるなど参考にしてほしい。

平井委員 雑誌スポンサー制度とはどのようなものか。また、鹿ノ台図書室は小さいお子さんの利用が多いと思うが、唯一「こどものとも0・1・2」という雑誌を置いていないが、大丈夫なのか。

事務局 雑誌スポンサー制度とは、各館で並んでいる雑誌の最新号にカバーを付けているのだが、そのカバーにスポンサーのポスターやチラシを付けて宣伝してもらい、その代わりに広告料としてその雑誌の購読料を担ってもらうというもの。スポンサーにとっては図書館を利用する不特定多数の人への宣伝になり、一方で図書館にとっては購入資金の節約となり、両者が協力して地域を盛り上げていくという考えで実施している。現在、多くの雑誌で市内の企業に協力をいただいている。

鹿ノ台図書室への「こどものとも0・1・2」の導入については、委員から提案があったと伝え、予算の中で購入を検討していきたい。

(4) 平成31年度(令和元年度)「社会教育基本方針及び重点目標」について  
事務局から説明(パワーポイントを使用)

(質疑等)

清水委員

発表の中で「子どもの居場所や人と人とのつながり」とあったが、自分の持っているイメージとずれているように思った。地域で子どものために活動している立場から見ると、行政で行っている様々な事業は手段に過ぎない。本来の目的は、それらの事業を通してまちづくりをどのように行っていくかを考えることであると思う。一時的な行事をたくさん行うだけではなく、様々な団体や地域の人とどのように連携して、24時間子どもの居場所をサポートできるかを考えていただきたい。イベントに参加できる子どもだけではなく、様々な事情でイベントに参加できない子どもを含め、全ての子どもたちの居場所を、地域の人と連携して綿密に作りあげていくような社会教育を行ってほしい。行事を通して地域の活性化やまちづくりにどれだけ貢献してきたかという具体的な動きを期待している。

松尾委員

自身がボーイスカウトに携わってきたが、ボーイスカウト運動は地域に根ざした子育てに関する活動なので重点目標に入ってきたらいいと思う。

また、自治会によっては子どもはいるのに子ども会が無くなっている。親が子ども会の活動の世話をしたくないというのが理由だと考えている。それを課題として、親に支援や指導を行うのも、社会教育の中で大切なテーマであると思う。

地域ぐるみの活動など、市からの補助が出ているものがあるが、ただ行事を行うのではなく、活動をどのように広げていくかを、社会教育として考えていく必要がある。

清水委員

地域での活動の中で、あいさつ運動は実績があり、子どもたちが大人顔負けの挨拶をするようにはなった。しかし、何かしてもらったときの「ありがとう」や「さようなら」は言えない子どもも多い。3つの公民館を子どもの学習会の為に貸しているの、先生方と協力して、帰る時にそれらの言葉を言うように指導していこうと思う。挨拶をして帰るとい、人間として基本的な事を教えるのも社会教育の原点であり、地域で徹底してバックアップしたい。

大谷議長

学校教育と社会教育が融合していかないと子どもは育っていかない。行政では子どもたちが学んでいく、体験する機会を多く与えているが、どのような目的を持っているかを運営する側が理解し、地域の人を巻き込む方法を考えていく必要があるという意見をいただいた。ただイベントをたくさん行うのではなく、そこにある目的を地域で考えながら、地域みんなで子どもたちを育てるという意識を持ってやっていくということが大切になっていく。

(5) その他

本年度の社会教育委員会議、社会教育研究大会の日程について

閉 会